



東陽病院 放射線科長 片山晴彦

健康への

メッセージ

シリーズ 74

『放射線ひばく』について

光町の皆さんこんにちは。先頃、茨城県東海村の核燃料加工施設JCOで起きた臨界事故による『放射線ひばく』には、皆さんも関心がおありだと思います。今回はそれに関連して『放射線ひばく』について少しお話しようと思います。

『放射線ひばく』には大きく分けて自然放射線によるひばくと人工放射線によるひばくがあります。人工放射線には医療用X線検査やがん治療に使われている放射線、核実験などで生じた放射性物質からの放射線、原子力発電に伴う放射線、工業や農業の分野で使われている放射線などがあります。私たちが受けるひばく線量(どのぐらいひばくしたかを示す単位、通常シーベルトという単位を使います)は自然放射線によるものが大部分で、その次に医療による放射線となっています。日本などの先進国では医療放射線によるひばく線量は年間1〜2ミリシーベルト(国民の平均)といわれています。ちなみに1ミリシーベルトは千分の一シーベルトです。先頃事故でひばくした方は10〜15シーベルトとのことです。その線量の多さがおわかりだとおもいます。

私たちは宇宙線や建築物の中、大地、空気、食べ物の中などから、避けることが出来ない放射線(自然放射線)を受けています。自然放射線による『放射線ひばく』は世界平均で

2・3ミリシーベルトと言われておりますが、地域差があり、千葉県ではおよそ1ミリシーベルト程度と言われております。アントニオ猪木の育ったブラジルや釈迦の育ったインドのある地域では大地からの放射線の影響が大きく日本の数10倍を越えるところもあります。しかし、その地方に障害が多いとか、病気が多いと言う報告はありません。

医療による『放射線ひばく』では、たとえば、胃の集団検診1検査では4ミリシーベルト、胸の集団X線撮影1回では約0・3ミリシーベルト程度のひばく線量になります。東陽病院では胸部X線検査1回で約0・12ミリシーベルト程度です。検査によってひばく線量は異なりますが、通常この程度の『放射線ひばく』ではなんらかの症状が出る可能性はなく、臓器へのひばくの影響のほとんどが約1日で回復すると言われております。医療におけるX線検査は病気の早期発見、正確な診断のためにはかかすことが出来ません。我々、放射線技師も、少ない『放射線ひばく』でよりよい診断情報を提供できるよう務めております。限られた紙面では充分ご理解出来ない点もおありだと思いますので、疑問の点は病院にお問い合わせ下さい。

※東陽病院の休日当番日

1月1日(祝) 23日(日) 午前9時〜午後5時

☎041335

母親学級開催

日時 1月28日(金)午後2時から4時
場所 東陽病院2階 産婦人科外来
対象 制限はありません

冬の企画展示

あったかお鍋の本

特集

この時期に欠かせない人気料理といえば、やっぱり体の芯からあたたまる鍋。ちりなべ、しゃぶしゃぶ、水炊き、寄せなべ、おでん等大勢で食べるのもっとおいしくなりますね。そんな鍋料理の本を紹介します。

- 「おなべとあったかおかず」 主婦の友社
- 「相撲部屋直伝のちゃんこ料理50種」 成美堂出版
- 「みんなで囲むあったか鍋料理」 フティック社
- 「小林カツ代のこんなに簡単煮込み料理」 廣済堂出版
- 「王様のキッチン 鍋の競演」 河出書房新社 他



＝町立図書館＝
☎043311

この他にも
たくさん本を
展示して
います